

# 学校での支援に活かす心理アセスメント

第1回

## 改めて「発達障害とは？」 について考える



山口大学教授

木谷 秀勝

きや ひでかつ 臨床心理士・公認心理師として、児童期から成人期までの発達障害児者の心理アセスメントや学校・地域支援について実践や研究をしています。

みなさん、こんにちは。これから一年間連載を担当します木谷秀勝と申します。いつもは大学で教育と研究とあわせて、子どもたちと元子ども（成人）たちの相談を受けている臨床心理士・公認心理師です。

相談を受ける場合には、ウエクスラー式知能検査や臨床描画法など、これからこの連載で紹介することになる心理アセスメントの技法を数多く活用しながら、子どもたちの「言葉では表現できない」心の世界を一緒に発見していく相談活動を行っています。

同時に、発達障害（神経発達症群／神経発達障害群）のある子どもたちを長年（一〇年から二〇年）にわたり継続的に支援するとともに、小学校から高校までの発達障害児の成長過程において学校支援を実践しています。この連載でも、こうした学校支援の経験をもとにして、さまざまな心理アセスメントの効果的な活用方法とその実践事例について紹介する予定です。

発達障害とは？

連載最初の今回は、基本的な理解として、改めて「発達障害とは？」について考えてみましょう。もしかしたら、今さら発達障害について学ばなくてもいいのではと思っっている方々も多いかもれません。

一方で、ベテランの先生方は、こんな感覚を持っていないでしょうか。

「昔言われていた発達障害と、今はなんとなく違ってきているよね」

実際に、以前言われてきたような、いつもパニックを起こしている、教室から飛び出す、嫌なことがあると耳をふさいでいる、そのような子どもたちが減ってきていませんか。たしかに、通級制度や特別支援学級での実践が進んだことは事実ですが、実際に学校現場でよく聞く言葉は「グレーゾーンの子どもたち」とか、「障害なのか、性格なのか」「障害が軽度化している」という声です。その影響でしょうか、先生方それぞれの発達障害のとらえ方が大きく違ってきている印象を受けることが多くなりました。

そこで、ちょっと専門的になりますが、アメリカ精神医学会が二〇一三年に改訂したDSM-5（精神障害の診断と統計マニュアル第5版）の基本的な考え方と、あわせて発達障害の最近の考え方を紹介します。

「環境要因」が重要になってきている

発達障害の研究では、現在も原因論として多くの遺伝子や脳科学方面の研究が進んでいることは確かです。こうした根本的な治癒を目指す研究も重要ですが、それ以上に「環境要因」の研究の価値が重視され始めました。

例えば、学校現場でも「同じ発達障害の診断なのに、どうしてこんなにも行動が違うんだろう？」と疑問に感じたことがあ

るのではないでしょうか。それは、DSM-5にも示されているように、発達障害は専門的には「多因子疾患」であるということが理由なのです。簡単な言葉で表現すると、「遺伝×環境×個々の障害特性」ということです。でも、ここで注意しないといけないことがあります。この考え方は、一九六〇年代以降に流布した「発達障害は母親の育て方の問題」とする原因論に戻ってしまう可能性がある点です。実際には、母親自身というよりも、母親を取り巻くさまざまな育児環境が大きく影響していると考えてください。

この点を踏まえながら、今後の連載では、発達障害の「環境要因」について考えてみます。

それはもっと直接的な言葉で言えば、「教育が持つ可能性」にもつながります。学校は、一日の大半を過ごす（時間環境）だけでなく、多くの友達・先生との出会い（人間環境）、そして好奇心を刺激する学びの場（創造性を育む環境）でもあります。多くの子どもたちにとって楽しい時間である学校環境が、どうして発達障害のある子どもたちにとって自信を失う環境となるのでしょうか。次号で考えてみましょう。

幼少時から成人期でも見られる状態

先に紹介したDSM-5の新たな診断基準では「神経発達症群／神経発達障害群」というように、「神経」が頭に付いています。このことには、実は、大きな意味が秘められているのです。

「神経」は、英語でNeuron（ニューロン）になります。胎児期に生じるニューロンのなんらかの形成異常によって、発達障害のある子どもたちの幼少時に見られる脳機能の特性とそれに伴う行動面の機能不全が、成人後も継続して見られることを意味しています。簡単に言えば、発達障害の根本的な障害特性は、大人になっても治らないことを意味しています。

だったら、先の環境要因とは矛盾しないかと思われるでしょう。実際は、幼少期から継続的な支援があれば、成長とともに環境適応力は向上します。それでも、初めての環境や人間関係になると、生まれながらの脆弱性（弱さ）によって、同じパターンの失敗が繰り返されることは多々あります。

だからと言って「やっぱり、支援しても障害は治らないのか」と意気消沈する必要はありません。筆者の実践経験からも言えるのは、小学校・中学校・高校（筆者は大学でも支援をしています）と長期的に支援を継続することで、成人後の障害特性によるリスクを最小限にすることも可能です。こうした実践事例は連載の後半で紹介します。

## いよいよ地域社会で主体的に活動できるか

長年筆者がかかわってきて、なんらかの就労を続けている青年たちに話を聞くと、仕事と同時に、趣味の時間やリフレッシュする時間とそのためのお金（給料）との絶妙なバランス感覚が大切だとわかります。頑張って働く仕事一辺倒の生活ではな

く、仕事も余暇も楽しむことができるように生活の質（Quality of Life: QOL）を充実させるといいうことです。

こうしたQOLを大切にする視点は、精神医学の世界でも、抑うつや不安障害などの予防として注目されています。

しかも、そこにもう一つ大切な視点があります。それが「主体性」（積極性、能動性）です。

みなさんもすでに気づいていると思いますが、学校時代に教師の指示に従順だった児童生徒ほど、成長してからも「受け身的」なままで、指示がないと自分から動くことができない状態になっていることがわかってきました。

逆に、多動があったりこだわりが強いなどして、手がかかる児童生徒のほうが、何に好奇心を持っているかがわかりやすいことは確かです。そして、この好奇心を活かす継続的な支援が、学校で主体的に学習する姿勢だけでなく、地域社会でも主体的に活動しようとする、QOLの高い生き方につながります。

筆者の場合も、小学生の早い段階から、それぞれの地域の事情を考慮しながら、余暇支援など自分らしさを大切にした生活ができるように支援することを基本としています。この点も、発達障害のある子どもたちが「一番困っていることは何か？」をテーマとして連載で考えます。

\*

これから一年間、この連載では、発達障害のある児童生徒が「どのような学校環境だったら伸びるだろう?」、しかも「長期的な視点から見た最適な支援とはどんなものだろう?」、そして

「その基盤として、日常生活ではどんな点に気をつけていけばいいのだろうか?」、この三つの視点を持って、発達障害に関する最近の考え方と心理アセスメントとの関係について考えてみたいと思います。

でも、「これらの答えが、ウエクスラー式知能検査や臨床描画法で本当にわかるの?」と疑問を持った方も多いかもしれません。その点は、次回からのお楽しみに。

また、毎回、「今月のおすすめ本」として、本を一冊ずつ紹介することにします。こちらにも参考にしてください。

### 今月のおすすめ本

市川宏伸編著『発達障害の「本当の理解」とは―医学、心理、教育、当事者、それぞれの視点』金子書房、二〇一四年

筆者も分担執筆者として書いていますが、さまざまな視点から発達障害の理解を広げることが、学校現場での支援を考える場合にも参考になります。二〇一四年の発刊以降も多くの方々に読まれている良書です。

# スクール プランニングノート<sup>®</sup>

2021年版好評発売中!



Contents  
年間計画表  
月間計画表  
週間計画表／フリーメモ  
アドレス帳＋別冊記録ノート



B5変型サイズ・カバー付  
2021年4月～2022年3月 ※Mタイプは3月始まり  
本冊(208頁)＋別冊・記録ノート(48頁)  
A・B:定価 2,200円(税込) M:定価 2,750円(税込)

**小学校**  
教師向け  
[Aタイプ]

**中学・高校**  
教師向け  
[Bタイプ]

**教頭・副校長・  
教務主任向け[Mタイプ]**

※自由度の高いUタイプ(A4サイズ)もございます。ホームページでご確認ください。

学事出版 千代田区外神田2-2-3 FAX 0120-655-514 [http://www.gakuji.co.jp/book/spn\\_2021.html](http://www.gakuji.co.jp/book/spn_2021.html)